



隣の少年

凜音

辺りが静かになった事に気付いて、リヒトはそっと眼を開けた。眩しい、とさえ形容出来るような白い光が飛び込んでくる。リヒトの視界は白く塗り潰されたが、ほんの僅かな呼吸を置いて、世界は戻ってきた。リヒトが、或いは気付いたと云ってもいい。

しかし彼が立っていたのは見知らぬ場所だった。円形の空間の外れに彼は立っていた。周りは白い壁で覆われ、その壁に沿って所々に観葉植物、出入り口と思しき扉が有るだけだ。天井を仰ぐと、それは遥かに高い。硝子張りの半球を伏せて置いたような天蓋の向こうには、白くくすんだ空が広がっている。太陽は見えなかったが、とても明るかった。床が白いので、降り注ぐ光に反射している所為もあるのだろう。鳥籠の中に居ようだ、とリヒトは思った。実際鉄骨の隙間から覗く空はあまりに遠く、あまりに細かく分割されていた。高すぎる天井に、一瞬眩暈を覚える。リヒトは眼を閉じて顔を天井から立っている空間の方向へと戻した。眩暈が収まるのを待って、再び眼を開く。「カシャ」、と何か機械音が聞こえた気がした。

リヒトは写真展に来ていたようだった。パネルが無造作に置かれ、同じく放り出すように置いてあるパイプ椅子の上には順路を示す表示がある。てんでに好き勝手な方向を向いているパネルには、どれもモノクロームの写真が架けてあった。リヒトは、まず手近なパネルに「カシャ」近づいてみる。

大きさもモチーフもまちまちの写真が、タイトルだけを表示したプレートとともに架けてあるだけの、飾り気の無い展覧会のような。リヒトは割合、こういう趣向のものが嫌いではなかった。特に興味が有るわけではないが、ただぼんやりと眺める「カシャ」分にはいい。高層ビル、電柱、踏切、交差点——どれもありふれた街中の光景だったが、共通しているのは何れの写真もモノクロームである事と、人物をモチーフとしたものが無い事だった。人造のものを撮影してあるのに、モノクローム故にそれはどれもおよそ生活感が無い。リヒトはでたらめに「カシャ」パネルを歩き来した。展覧会に来ているのはリヒトだけではなく——指折り数える程しか居ないのだが——その誰もがリヒトのように順路を無視して進む事は無かった。白い、リボンとフリルの些か過多「カシャ」な少女。細身の黒のセータァに同色のパンツの青年「カシャ」。背中が大きく開いた、長いスカートのドレスの女性は、服と同じ長い黒髪「カシャ」を綺麗に結い上げていた。誰も、話し声はおろか足音すら立てずに、写真を眺めている。

リヒトは立ち止まった。無造作に並べられたパネルの外れに来て初めて、彼は先程から続いていた断続的な機械音の正体を知る。

「——カメラ？」

随分と年代物のカメラである。大きな箱は所々錆びたり、色が剥げたりしており、それが最近作られたものではないことは一目瞭然であった。箱の後ろには布が掛けてあり、人が其処から頭を突っ込んでレンズを覗き、撮影するのだろう。但しその年代物のカメラは無人であり、又、勝手にシャッターが切られている。先刻から続いていたあの「カシャ」という音はその、シャッターの切れる音らしかった。リヒトは一旦はそのカメラに近づいたが、その時ふと、それまで彼が引っかかっていた違和感の原因に思い当たって振り向いてみた。相変わらずパネルは無造作に並べられたまま黙っている。リヒトから向かって一番左端に置いてあるパネルの前には青年が立っていたが、彼は先程から全く動いていない。軽く腕を組んで、作品に見入っているようだった——それこそ、凍りついたように。肩も、腕も、呼吸に合わせた動き、というものを失っていることにリヒトは気付いた。踵を返したリヒトは、パネルに見入っていると思われる青年に近づいた。しかしどうして青年が動かないかということは、それ程近づかなくても判った。

彼は、つまり写真に撮られたパネルなのであった。展覧会の一部として彼も、展示されているのである。実に、良く撮れた写真であった。彼の後方へ回り込むと、彼の写っている白いパネルが背景と同化してただけだということがよく判る。彼は、人間としては有り得ないほど色彩を帯びていない。白か、黒か。それは展覧会の写真と何も変わるところが無かった。

リヒトは駆け出した。

黒髪の貴婦人の横を通る。実に良く撮れた写真であった。彼女の美しさはモノクロームにまで彩度を落とそうと、全く損なわれることは無く、寧ろ髪の流れと腕の線が引き立ってとても綺麗だとリヒトは思った。然し、人ではない。彼女もまた、写真であった。

何時の間にか迷路のように増殖したパネルは、リヒトの行く手を阻み、出口へ決して向かわせない腹積もりらしい。

ただ、めちゃくちゃに走るリヒトの背後から追いかけてくるカメラの、シャッターを切る無機質な音だけが近く、大きくなっていく。何百、何千、何万もの写真が貼られているパネルの合間に、写真に撮られた人間がたくさん並んでいる。白いドレスを着ていた少女のパネルを押しつけて、なおもリヒトは先へ進んだ。兎に角此処から出ることが先決だと、彼はそう判断していた。急速に視界が開ける。

走って走って走って、リヒトは遂にそのパネルの樹海から脱け出せた。開けたリノリウムの床の上を転がるように進んで、冷たい壁に左手を突いて躰を支える。酷く息苦しかった。黒いリボンタイを緩め、大きな立ち襟のシャツの釦を外して少し空気を入れてやると、安堵感が吹き出してくるようだった。首に掛けている、お気に入りのペンダントがしゅら、と鳴った。リヒトは漸く顔をあげて、周囲を見回した。あれだけ辺りに溢れて視界を遮っていた筈のパネルは嘘のように無くなっていた。ゆっくりと首を巡らせてみるが、一枚たりとて其処にパネルは無い。そして誰も居なかった。ただ明るい空間が彼の周囲をぐるりと囲んでいるだけだった。

リヒトは壁に突いていた手を放そうとして、そこに壁があることに驚いた。振り向くと、其処には一枚のパネルが立っている。パネルには写真が飾られており、大判のその下には樹脂製のプレートに黒い文字で唯「リヒト」と記されている。

黒い髪に、真っ白の肌、大き目の襟の白いシャツにペンダント。驚いたような顔をしたリヒトの写真の、空いている左後方にはあのカメラが写っていた。

「僕——……？」

「カシャ」

シャッターの下りる音がすると、それきり辺りは全く明るく静かになった。

標本箱

「お邪魔します。.....誘ってくれて、嬉しいよ、」

サトルは薄く笑いながらヒロトの後に続いて靴を脱ぎ、廊下に立った。

「今日は両親が帰るのが遅いから、ゆっくりして行ってよ。何なら、夕飯も食べていくといい、」

ヒロトはサトルに笑いかけると、こっち、と促した。応接室に、サトルに見せたいものが仕舞ってあるのだった。

もとよりヒロトは、自分から人に話しかけることが苦手な性質だった。

学校の休憩時間も、一人で読書をしていることが多い。

叔父が、貿易関係の仕事をしている関係で、ヒロトのコレクション――蝶の標本の収集をかなり手伝ってくれていた。

「その本、僕、持ってるよ。」

転入初日、物珍しげにサトルを見る級友たちをよそに、読書中のヒロトに話しかけてきたのはサトルの方だった。

「え、あ.....。そうなの、」

「僕も、綺麗なものが好きでね。」

そう云ってサトルは薄く笑った。

それがきっかけで、ヒロトとサトルはよく話すようになった。

そうして今日、ヒロトは叔父から届いたばかりの標本をサトルにも見せようと、家に誘ったのだった。

「今年は、貴重な標本を送ってもらったんだ。全く、叔父には頭が上がらないよ。」

二人分の紅茶を乗せたトレイを応接室のテーブルの上に置くと、ヒロトはサトルの方を見た。サトルは口許に笑みを湛えたまま、部屋を見渡している。

「早速、見るかい、」

「.....紅茶を頂いてからにしようかな。」

サトルは席に着いた。ヒロトも、サトルの向かいに座る。熱い紅茶を啜りながら、ヒロトは夢中で今年届いた標本のことを話した。

「黒地に青い模様が綺麗なんだ。なかなかいない種類だと聞いて、本当に叔父に感謝したよ。」

「.....ふうん、」

サトルはティーカップの中身をスプーンでかきまわすと、溜息とも取れぬ返事をして、カップを置いた。

「.....で、何処だい、」

すっと、猫のように立ち上がる。ヒロトも遅れて席を立つと、標本箱が仕舞ってある棚に向かった。

「ちょっと待っていて、」

「うん、」

ヒロトは幾分優越感のようなものを覚えながら棚の鍵を開けると、一番上のガラス箱を取り出した。

気をつけて運んで、サトルに見えるように卓上に置く。

「.....綺麗だね、」

「そうだろう、」

サトルの白い指が、標本箱の留め金を外した。サトルは黒アゲハを手にとると、薄く笑って溜息を吐いた。

と。

サトルはヒロトの目の前で、黒アゲハを一息に握り潰した。薄く、笑ったまま。

「.....、」

ヒロトが言葉を失っていると、サトルはヒロトの手を取って其処に握り潰した黒アゲハを乗せた。

「儂いものは、美しいね。」

ポケットから白いハンカチを取り出すと、サトルはそれで手を拭きながらそう云った。

黒アゲハの燐粉が、ハンカチにべっとりとこびりつく。

ヒロトは震えていた。

「僕はもう、帰らなきゃ。.....綺麗なものを有難う、」

さよなら、と踵を返したサトルの横顔は最後まで薄く笑っていた。

カタカタ、と音がしそうなほど震えているヒロトの指の隙間から、粉と化した黒アゲハがはらはらと落ちていった。

雪景色

今年初めての雪の日だった。彼はさくさくと凍る雪を踏みしめながら、一人、廃屋となった小学校を目指していた。そのあたりはもう獣道で、通っていたことのある者にしか目的の小学校にたどり着くのは難しいだろう。しかし、彼の脳裏の記憶は鮮明で、わいわいと賑わっていた通学路さえ見えるようだった。

吐く息が白く凍る。寂れて、手入れもされていない校庭の前には剥げたペンキで「立ち入り禁止」と書かれた看板が斜めにかかっていた。手袋をはめたまま、彼は策を乗り越える。小学生だった彼には到底出来ないことだったが、今となっては随分背も伸びた。柵を乗り越えるのは容易い事で、彼はコートを柵に引っ掛けることの無いように気をつけながら校庭に降り立つと、向かって右側の一階の教室から順に中を見るでもなく覗いていった。

彼の足が、四番目の教室の前で止まる。

そこは保健室だった。無論、今も使われているはずは無く、ただ雪と、歳月の汚れがこびり付いた薄暗い窓から、光がさしている。ふと、彼は彼女のことを思い出した。

この小学校が廃校となってから、必ずと云っていい程、一緒に季節の変わり目に景色を見に来た彼女。肺の病気で、空気の綺麗なこの田舎でしか、保養が出来ないのだった。体力はそれほど落ちているわけでもないのだが、日に日に、年を重ねるごとに、彼女はやつれていった。

「可笑しいわね、貴方と一緒にこの学校に通ったことなんて無いのに。私もうすっかり此処までの道程や樹の種類なんかを覚えてしまった、」

「そう、」

「一緒に行こうなんていうからよ。あ、でも車で来るのは無料だわ。」

ふわり、と春の太陽のように笑う彼女。半袖のワンピースの腕には、点滴の痣が残っていた。去年の春先のことだった。

――ねえ、一緒にまた、あの学校へ行かない、

それが最期の言葉となったのを、彼は今でも記憶している。

サナトリウムを一緒に出て、無理矢理と云っていい、彼女の望むままに廃屋を目指した。

ガスも通っていない寒い校内に侵入すると、彼女は息が切れたといって蹲った。彼は彼女を始めて抱き上げた。羽根の様に軽かった彼女。少し埃っぽい保健室のベッドに横たえると、持っていた吸入器を取り出す。発作が出た彼女は苦しそうに、しかし微笑んだまま、彼が宛がおうとした吸入器を拒んだ。

「私ね。貴方と出会えて良かったと思ってるの。……こうして綺麗な景色が見られて、沢山笑えて、……あ、ねえ見て、」

彼女は震える腕で懸命に窓の外をさした。眩しい位の光の中に、風花が待っている。

「四月なのに……ほんとに、貴方といると可笑しなことばかり起こる、」

声も出さずに彼女は笑って、微笑んだまま、瞳を閉じた。彼にはそれが、何を意味するのか暫く解らなかった。彼は数時間もそうして、唯凍えるベッドに横たわる彼女の白い頬を眺めていた。そして、寒いだろう、と彼女の隣にそっと自分も体を横たえて、手を握った。点滴の跡の残る、冷たく乾いた手。初めて涙が溢れた。今まで生きてきて、初めて、意味も解らず涙が溢れた。

「泣かないで、」

今年最初の雪の日。彼女のことを思い出しては、この廃屋でひっそりと彼は涙を流していた。冷たい保健室の硝子窓に口付ける。そこだけふわり、と熱くなった気がした。そして聞こえた、あの笑い声、笑ってよとせがむ声、泣かないで。